

問1 日本列島で稲作が広まり、人々が竪穴住居に住んで定住生活を行っていた時代について説明した記述があります。その記述には、大陸から伝わった銅鐸や銅鏡などの青銅器が祭りの道具として用いられていたことや、当時の中国の歴史書において日本が「100余りの国」に分かれていたと記されていることが示されています。この時代の名称として正しいものを選びなさい。 (2022年 鹿児島県公立入試 類似)

1. 奈良時代 2. 弥生時代 3. 古墳時代 4. 縄文時代

問2 大陸からの技術伝来によって起きた、弥生時代の道具の変化に関する説明として正しいものはどれですか。 (2018年 奈良県公立入試 類似)

1. 青銅が農具の主材料となり、それまで使われていた木製農具は全く使われなくなった。
2. 朝鮮半島から伝わった技術により、打製石器を加工して鉄のように鋭くする技法が確立した。
3. 石器から金属器への移行が進み、実用的な道具には主に鉄が用いられるようになった。
4. 中国から伝わった鉄を使い、日本独自の文化である縄文土器の文様がより複雑になった。

問3 佐賀県で発見された、弥生時代の大規模な環濠集落の跡として知られる遺跡について述べた文として、適切なものはどれですか。 (2016年 岐阜県公立入試 類似)

1. 縄文時代の集落跡であり、大型の竪穴住居やクリの栽培跡が確認されている。
2. 戦国時代から江戸時代にかけて銀の採掘が行われた、世界遺産に登録されている遺跡である
3. 物見やぐらや竪穴住居が復元されており、銅鏡や銅鐸などの青銅器が出土している。
4. 相沢忠洋によって発見された、日本に旧石器時代が存在したことを証明する遺跡である。

問4 弥生時代、大陸から金属器が伝わったことで人々の生活は大きく変化しましたが、当時の「青銅器」の主な用途と代表的な道具の組み合わせとして最も適切なものはどれですか。 (2018年 大阪府公立入試 類似)

1. 鋭利な刃物として戦闘に用いられ、剣や矛などの武器の主流となった。
2. 食料を保存・調理するための容器として用いられ、須恵器などが作られた。
3. 頑丈な農具として開墾に用いられ、すきや鍬（くわ）の先などが作られた。
4. 祭祀や儀式のための道具として用いられ、銅鐸や銅鏡などが作られた。

問5 邪馬台国の女王である卑弥呼は、239年に中国の魏へ使節を送り、皇帝から「親魏倭王」の称号や金印、銅鏡などを授かりました。卑弥呼がこのように中国の王朝と外交関係を結んだ主な政治的背景として、最も適切な説明はどれですか。 (2020年 徳島県公立入試 類似)

1. 魏で施行されていた律令制度を学び、日本で最初の本格的な法治国家を建設するため
2. 魏から金銀などの貴金属を輸入し、国内で独自貨幣の発行を開始するため
3. 朝鮮半島南部にある任那の日本府を維持するために、魏へ軍事支援を要請するため
4. 魏の皇帝の権威を利用することで、対立していた狗奴国などに対して自国の優位性を示すため

問6 1世紀頃、日本（倭）の小国の王が中国の漢（後漢）の皇帝に使いを送り、皇帝から臣下として認められた証として授けられたとされる金印には、どのような文字が刻まれていますか。 (2019年 長野県公立入試 類似)

1. 親魏倭王 2. 漢委奴国王 3. 卑弥呼 4. 志賀島

問7 1世紀半ばに日本の「奴国」の王が中国へ使者を送り、皇帝から金印を授かったという出来事が記されている、当時の中国の歴史書として正しいものを答えなさい。 (2016年 大阪府公立入試 類似)

1. 後漢書 2. 史記 3. 魏志 4. 日本書紀

問8 弥生時代に大陸から伝わった技術や文化が、当時の社会に与えた影響を説明した文として、最も適切なものはどれですか。 (2022年 鹿児島県公立入試 類似)

1. 青銅器が実用的な農具として普及したことで、開墾が進み全国的な統一国家が誕生した。
2. 狩猟や採集がより効率的になり、人々は移動を繰り返しながら竪穴住居に住んだ。
3. 稲作の普及により食料の蓄えが可能になり、貧富の差や集団をまとめる王が現れた。
4. 巨大な前方後円墳を築くための高い土木技術が伝わり、各地に大規模な古墳が作られた。

問9 弥生時代、稲作の普及によって余剰生産物が生まれると、富を蓄えた有力者が現れ、各地に小規模な政治集団である「国」が形成されました。当時の倭（日本）の有力な王は、中国の王朝から自らの地位を正式に認められることで、周辺諸国に対する権威を高めようとしてしました。西暦57年に、倭の「奴国」の王が中国の後漢の皇帝から授かった、その地位を証明するための品物として正しいものを選びなさい。 (2018年 神奈川県公立入試 類似)

1. 「漢委奴国王」と刻まれた金印 2. 三角縁神獣鏡 3. 稻荷山古墳から出土した鉄剣 4. 仏像や経典

問10 表面に当時の生活の様子や動植物、流水文などの模様が描かれ、上部に「鈕（ちゅう）」と呼ばれる持ち手のような部分がついている、弥生時代の祭祀用青銅器の名称は何か。 (2026年 新潟県公立入試 類似)

1. 銅戈 2. 埴輪 3. 銅鐸 4. 銅矛

問11 弥生時代、稲作が西日本から東日本へと普及して食糧の蓄えができるようになると、各地で土地や水をめぐる争いが起こり、小さな国々が誕生しました。こうした中、倭の奴国の王が中国の王朝へ使いを送った目的や背景として最も適切な説明を選びなさい。 (2022年 広島県公立入試 類似)

1. 巨大な前方後円墳を築造するための最新技術を導入し、日本列島全体の統一を早急に成し遂げようとした。
2. 中国の後漢の光武帝から金印を授かることで、自らの支配の正当性を背景に権力を強めようとした。
3. 土偶を用いた独自の祭祀を中国に認めてもらうことで、大陸での宗教的な影響力を拡大しようとした。
4. 鉄製農具や須恵器の製作技術を独占し、縄文時代から続く狩猟・採集の生活をより豊かにしようとした。

問12 1世紀頃の東アジアにおいて、中国の皇帝が周辺国の支配者に対して「みつぎ物」の見返りとして「称号」や「印」などを与える国際秩序がありました。倭の王が中国へ使いを送った歴史的背景や目的として最も適切な説明はどれですか。 (2019年 長野県公立入試 類似)

1. 仏教などの新しい宗教を中国から正式に導入し、国を治めるための思想として活用しようとした。
2. 中国と対等な立場で外交関係を築き、軍事的な同盟を結ぶことで領土を拡大しようとした。
3. 中国の皇帝に臣下として認められることで、自らの支配者としての地位を国内や周辺に示そうとした。
4. 朝鮮半島北部の小国として、中国の強力な武力による直接支配から逃れるための許可を求めた。

問13 3世紀の中国の歴史書である『魏志倭人伝』には、当時の日本（倭）の様子が記されています。それによると、倭ではもともと男子を王としていましたが、国が乱れて互いに攻め合う状態が数年続きました。この混乱を収めるためにとられた歴史的な経緯として正しいものはどれですか。 (2020年 徳島県公立入試 類似)

1. 仏教を国教として導入し、人々の信仰によって乱れを鎮めた
2. 狗奴国の王が武力によって全ての小国を制圧した
3. 一人の女性を王として共立し、国をまとめさせた
4. 中国の魏から派遣された総督が直接統治を行った

答え合わせ・解説

問1	答え 2 弥生時代	紀元前数世紀から紀元後3世紀頃にかけての日本列島では、大陸から伝わった水稻耕作（稲作）が普及し、食料生産が安定したことで社会の仕組みが大きく変化しました。この時代、鉄器が武器や工具として使われる一方で、銅鐸などの青銅器は豊作を祈るための祭祀具として重宝されました。また、中国の歴史書『漢書』地理志には、当時の日本（倭）が100余りの小国に分かれ、一部の国が楽浪郡を通じて中国（漢）に使者を送っていたことが記されています。
問2	答え 3 石器から金属器への移行が進み、実用的な道具には主に鉄が用いられるようになった。	大陸からの技術伝来により、それまでの石器を中心とした生活から、金属器（鉄器・青銅器）を利用する生活へと変化しました。これを技術革新と呼びます。鉄は非常に実用性が高く、農具や工具、武器として社会を支える基盤となりました。この変化は、食料生産の増加や集落間の争い、さらには社会の階層化にもつながる重要な転換点となりました。
問3	答え 3 物見やぐらや竪穴住居が復元されており、銅鏡や銅鐸などの青銅器が出土している。	吉野ヶ里遺跡は佐賀県に位置する弥生時代の代表的な遺跡です。この遺跡では、防御のための堀を巡らせた環濠集落の跡が確認されており、復元された物見やぐらや、祭祀に使われたと考えられる銅鐸などの青銅器が出土しているのが特徴です。選択肢にある縄文時代の集落は三内丸山遺跡、旧石器時代の遺跡は岩宿遺跡、銀山は石見銀山遺跡を指しています。
問4	答え 4 祭祀や儀式のための道具として用いられ、銅鐸や銅鏡などが作られた。	弥生時代には鉄器と青銅器がほぼ同時に伝わりましたが、それぞれの金属の特性に応じて使い分けがなされました。鉄器は硬くて鋭いため、武器や農具などの実用品として普及しました。一方、青銅器は美しい光沢を持つことから、神をまつる際の祭祀具や、村の権威を示すための道具として使われました。
問5	答え 4 魏の皇帝の権威を利用することで、対立していた狗奴国などに対して自国の優位性を示すため	邪馬台国は、南に位置する狗奴国と激しく対立していました。卑弥呼は当時、中国で強大だった魏の皇帝から公式に「倭の王」として認められることで、その権威を背景に国内の統治を固め、対立勢力に対して有利な立場を得ようとしたと考えられています。これは当時の東アジアにおける国際秩序を利用した外交戦略でした。
問6	答え 2 漢委奴国王	1世紀（西暦57年）に倭の奴国の王が後漢の光武帝に朝貢した際、皇帝から授けられたものです。この金印には「漢の委（倭）の奴の国の王」を意味する文字が刻まれており、当時の中国が周辺の支配者に称号や印を与えて地位を認める国際秩序（冊封体制）の一部であったことを示しています。
問7	答え 1 後漢書	西暦57年に倭の奴国の王が使者を送り、光武帝から金印を授かった事実は『後漢書』東夷伝に記されています。江戸時代に志賀島（福岡県）で発見された「漢委奴国王」の金印は、この記述を裏付ける重要な史料となりました。3世紀の卑弥呼について記された『魏志』倭人伝とは時代が異なるため、区別が必要です。
問8	答え 3 稲作の普及により食料の蓄えが可能になり、貧富の差や集団をまとめる王が現れた。	稲作の開始は、単なる食生活の変化にとどまらず、社会構造に劇的な変化をもたらしました。収穫した米を蓄えることで余剰生産物が生まれ、それを管理・所有する層が現れたことで、貧富の差や身分の違い（階級）が生じました。その結果、小国を治める王のような強力な指導者が登場し、中国の歴史書にある「100余りの国」のような政治的なまとまりが形成される要因となりました。なお、青銅器は主に祭祀用であり、実用的な農具は鉄器が担いました。
問9	答え 1 「漢委奴国王」と刻まれた金印	稲作が広まった弥生時代には、食料の蓄えや土地を巡って「争い」が起きようになり、集団を統合するリーダー、つまり「王」が現れました。当時の中国の歴史書である『後漢書』東夷伝には、倭の奴国の王が後漢の光武帝に使いを送り、金印を授かったことが記されています。この金印は江戸時代に現在の福岡県（志賀島）で発見されており、当時の日本が中国の王朝と外交関係を持っていたことを裏付ける重要な資料です。
問10	答え 3 銅鐸	銅鐸は、その形状から「鐘」のような役割を持っていたと推測されています。初期のものは音を鳴らすために小規模でしたが、時代が下るにつれて大型化し、村の祭りで見せるための宝物としての性格を強めていきました。
問11	答え 2 中国の後漢の光武帝から金印を授かることで、自らの支配の正当性を背景に権力を強めようとした。	弥生時代の日本では、稲作の普及に伴って貧富の差や対立が生まれ、各地に小国が形成されました。1世紀の57年、倭の奴国の王は中国（後漢）の光武帝に使者を送り、「漢委奴国王」と刻まれた金印を授けられました。これは、当時文明の進んでいた中国の皇帝に認められることで、他の小国に対する優位性を保ち、自らの支配権を強化する狙いがありました。選択肢にある鉄製農具や須恵器の普及、前方後円墳の築造は後の時代の特徴であり、土偶は縄文時代の文化です。
問12	答え 3 中国の皇帝に臣下として認められることで、自らの支配者としての地位を国内や周辺に示そうとした。	当時の倭の王は、東アジアで圧倒的な権威を持っていた中国の皇帝に「朝貢」し、その臣下として認められる（冊封を受ける）ことで、自らの支配の正当性を強化しようとした。これは対等な外交ではなく、中国を中心とした主従関係に基づく国際秩序の中に組み込まれることを意味しています。
問13	答え 3 一人の女性を王として共立し、国をまとめさせた	当時の倭（日本）では、小国同士が激しく争う「倭国大乱」と呼ばれる時期がありました。この混乱を収拾するため、複数の小国が連合し、まじないや宗教的な権威を持つ卑弥呼を女王として立てることで国内の安定を図ったことが『魏志倭人伝』に記されています。